

6. 牛サルモネラ症清浄化対策（第2報）と管内酪農家のサルモネラ浸潤状況調査

玖珠家畜保健衛生所
○松本航平・佐伯美穂・梅田麻美・木下正徳

【はじめに】平成27年4月に *Salmonella* Typhimurium（以下S T）による牛サルモネラ症が発生した農場の清浄化対策に取り組み、抗体検査の結果多くの潜在的保菌牛の存在が示唆された（平成27年度業績）。今回は同農場で平成28年10月までS T分離検査を継続した結果と管内酪農家における浸潤状況調査の結果を報告する。

【発生概要】乳用牛175頭、肉用牛17頭を飼養する農場で、平成27年4月から5月にかけて変敗した飼料を給餌した搾乳牛の内5頭が、泌乳量の低下、発熱及び血便を呈して死亡。4例目について診療獣医師から病性鑑定依頼があり、糞便からS Tを分離しS Tによる牛サルモネラ症と診断。平成27年5月のS T分離検査では、環境材料の39.1%、糞便の7.6%から分離陽性。抗体陽性率は68.2%であった。

【S T分離検査】

(1) 環境材料

平成27年5月以降平成28年10月まで毎月実施。陽性率は平成27年5月39.1%、6月8.2%、7月2.7%と減少し、8月に分離陰性となったが、9月19.2%、10月38.2%と増加。乾乳後期・分娩・哺乳子牛の各牛舎及び通路で多く分離。

(2) 糞便材料

平成27年5・7・9月に哺乳牛を除く全頭検査を実施。陽性率は5月7.1%、7月・9月は分離陰性。また、哺乳子牛について平成27年5月以降12月まで毎月実施。

陽性率は5月3.2%、6月0%、7月9.5%、8月0%、9月4.3%、10月70%であった。

【対策】平成27年5月以降9月まで哺乳子牛を除く全頭に生菌剤を投与していたが、哺乳子牛の陽性率増加を受け、平成27年10月以降は哺乳子牛を含めた全頭に投与するように変更。変更後、哺乳子牛の糞便からは11月・12月ともに分離陰性となった。平成28年1月から乾乳後期・分娩・哺乳子牛及び搾乳牛群のみ生菌剤を投与するように変更。

【浸潤状況調査】管内の酪農家（37戸：1711頭）で平成26年から平成28年に採材した血清を用いて、間接ELISA法でのサルモネラ04群に対する抗体検査を実施。この結果、抗体保有率は6.4%（25戸：110頭）であった。

【まとめと考察】平成27年5月以降8月にかけて環境及び糞便からのS T分離率は減少傾向であったが、9・10月に乾乳後期・分娩・哺乳子牛牛舎を中心に増加した。この結果を受けて、対策を見直し、平成28年1月以降環境材料からの分離陰性を維持している。このことから、分娩前後・哺乳子牛及び搾乳牛での排菌対策は、農場環境の清浄化を目指す上で有効であると考えられた。また、管内の酪農家における浸潤状況調査の結果、多くの農場にサルモネラの潜在的保菌牛が存在することが示唆された。